

初期の協会のあれこれ

東 条 猛 猪

昭和三十九年十二月一日午後三時から、北大クラーク会館で開かれた会合で「北海道自然保護協会」が設立し、私は会長に選任された。これに先立ち十月二十七日、今井道雄・井手貴夫両氏が来訪され、会長に就任するよう勸説があった。私は今井氏こそ適任であると応待したが、同氏は固辞して肯かかなかった。私は協会設立までの経緯や背景などは一切知らなかったが、北海道の自然保護には協力すべきであるという考えで、結局お二人の言分に従った。

発足した協会は、会費収入や受託調査収入などで賄う貧弱な世帯で、独立の事務所もなく、会議は植物園事務所の一室で催されるのが常例であった。会を運営し定期的に会誌も発行していただいた方々は、大変なこ

苦勞であつたらうとお察しする。

会議には専門の先生方、経済界の識者、場合により関係当局者なども出席され、随分活発な論議が行われることもあった。時に実地視察も行ったし、地に着いた具體的論議が多かつたと思う。協会側で問題の所在を知った時には既成事実が進んでおり、手遅れを嘆ぜざるを得ず、いかにすれば機を失せず、問題を捕え得るかを話し合つたこともあった。

会長として私が関係した自然保護の案件については、別の機会に述べたことがあり、ここに繰り返す余白もないが、自然を損う事業に対する途は、(一)反対か、(二)その実施の上で自然保護との調和を実現せしめるかのいずれかである。事業の必要性に対する評価の仕方、自然保護



の考え方など、各人それぞれに差異があるのは自然であるから、案件によっては協会内で意見の対立のあるのは当然であり、協会として結論を集約できたものもあるし、統一見解に達しない場合もあった。

協会の意見を実効あらしめる方法としては、世論の喚起・責任当局への建議陳情などが挙げられよう。特に事業執行当局の理解協力が肝要である。この点、特に町村知事が自然保護に終始深い理解を持ち、事を処理していただいたのには感謝・敬服している。少ない事例ではあるが、責任者が私たちと共に事前に現場に赴き、事業の内容容問題について意見交換を行なう場を持ったこともあった。近頃の世相を見ると、自然保護について意見や立場の違う人が、早目に会合して相手の身にもなって、充分に意見を交換する場を作つたらと思うことがある。

経済のソフト化・物の豊かさから心の豊かさへの潮流の中で、開発の方向内容は次第に変わるであろう。しかし、北海道ではまだまだ開発事業は必要であり、その方向内容は、当分大きな変化はあるまい。自然保護と地域開発との関係が、困難な問題を提起することも少なくないであろう。

北海道自然保護協会の健全な活躍を祈るや切である。

(拓銀取締役相談役・初代会長)

創立のころの思い出

今 井 道 雄

このたび北海道自然保護協会の二〇周年に際して、名誉会員にご推薦いただきましたことは光栄と存じます。

二〇年くらい前を思い出しますと、その頃ようやく自然保護という言葉が、一般の人びとの口に上るようになっていたのではないのでしょうか。

北大農学部 館脇 操先生が中心になって、札幌にも自然保護協会をつくらうということになり、私もそれに加わって相談いたしました。「誰方を会長にしようか……」ということ、白羽の矢を当時拓銀頭取だった東条猛猪さんに立て、私と井手さんとお願ひにうかがいました。「私より貴方の方が……」とたいぶ固辞されましたが、とうとうお引き受けいただきました。一九六四年の夏ごろではなかったかと思えます。私は大正四年一月生まれのうさぎなんです、東条さんは三つ年上でいらっしやいます。その後、東条さんはいへん熱心に会長の仕事をやって下さいまして、私たちも有難く思ったものです。創立総会はそれからしばらくして、十二月になって、北大クラーク会館で開かれ、正式に発足しました。当時

学長だった杉野目先生も出られました。

その頃は協会も小さくて、植物園の一室に事務室をおいていたので、そこでよく会合をもったものです。植物園で見る夕陽のキレイだったことが、いまでも目に浮かんできます。なにしろお金がないのですから、館脇さんの発案で、植物のエハガキを発行したのですが、これがよく売れて多少のお金もできました。あのとこのエハガキをとっておけばよかったと思います。まあ、あのようなエハガキをまた協会として出してみたらいかがでしょうか。もう少し学問的に検討して、動植物のシリーズも

近況のお知らせ

犬 飼 哲 夫

暑中御見舞申し上げます。

この度は名誉会員に御指名下さいまして誠に有難うございました。

また、二十周年記念の原稿依頼、有難く頂戴いたしました。実は、只今、脳硬塞の後のリハビリに専念致しておりますが、右手が不自由でございませう。娘が代筆とも思いましたが、なかなかうま

のを出したら歓迎されるのではないですか。

北大地質教室の鈴木 醇先生とは、いろいろ親しくおつき合ひさせていただきました。先生と、当時道新社長だった阿部さんと私の三人で、自然などについて座談会をしたこともありました。自然保護というのは、自然の保全と人間の活動の調和をよく計ってゆくところにポイントがあると思います。そんな観点から北海道自然保護協会が、ますます活動をひろげられてゆくことを期待しています。(一九八四年七月三十一日丸井本社にての対談より収録。八木健三) (札幌商工会議所会頭・初代副会長)

くはゆかぬと思いましたが、失礼させて頂きたいと申しております。 (代)

何卒おゆるし下さいませ。

八月四日

(原文のまま)

◇ (北大名誉教授・初代副会長)

犬飼先生には昨年八月お宅近くの路上で脳硬塞で倒れられ、ただちに入院されました。幸にして軽症ではありましたが、右半身不随となり、歩行は不可能で言語障害になりました。しかしその後、リハビリに専念された結果、だいぶ回復され、お元気になられましたが、右手は依然として不自由でおられます。

このたび、名誉会員ご推せんのを申しあげましたところ、頭初のようなお手紙を頂戴いたしました。(八木健三)

日高山脈への夢

石川俊夫

昭和五十九年十二月で協会も創立二〇周年を迎える。

最初は会員一〇三名で発足したが、いまや個人八二四、団体一〇六、計九三〇名の法人組織の大協会に発展し、特に最近の活発な運動は華々しい成果を挙げ実に喜ばしい。

会報は創立以来の活動を詳細に記録し、最近では会員の意見、感想も多く、体裁、内容も豊かになっている。会誌は編集の権化ともいべき山口透さんによって創刊号より全国他の自然保護団体の機関誌にないような高尚な様式と内容を誇っていたが、さらに「北海道の自然」と改題し、特集号を次々に刊行して、会員外にも広く好評を博し、経済面をも潤していると聞いて喜んでいる。

協会に入って二〇年、なんといっても同じ自然を愛する尊敬すべき、親しい各界の先輩、友人を多数得たことを幸福に思っている。協会創立前、植物園の館脇 操先生が仕掛人となり、林 常夫翁を会長とした自然愛好者のサロンの集いもなつかしい。いまは亡き大野精七、林 常夫、今田敏一、館脇 操、宮脇 恒、伊藤秀五郎、坂本直行、中野征紀の諸先生、先輩また会計監査を親切に続

けて下さった大塚 武さんを思い出しつつご冥福を祈りたい。

五十九年八月中旬、国際植生学会日本大会が「自然環境の創造を目指して」をテーマに活発に開催され、八月末には世界湖沼環境会議が琵琶湖畔に開かれ、国際的に自然環境の問題が重視されている現状である。特に植生学会は諸所現地を視察の後、こんな山地に本当に観光道路は必要だったのか、車道は自然を破壊するだけでなく、自然を愛する気持さえ奪ってしまう、世界に一つしかないような富士山に車道はつけるべきではない、など厳しい批判を加えている。

北海道新聞の「読者の声」、朝日新聞の「声」には老若各層の読者から「日高中央横断道路反対」「小樽運河埋立て反対」の投書が続き、いまなお尽きない。五十九年七月北海道自然保護団体連合(井手育夫代表)は日高中央横断道路予定コースの実地調査の後、朝日新聞に原生自然の危機を報告している。

これに対し、道は道々静内中札内線自然環境保全対策協議会を新設し、随時自然保護団体と協議するとし、自然環境保全審議会も保護対策の検討に当り、監視パトロールを強化することを約した。自然保護運動は行政の改善を一步進めたことになる。

従来、行政側は新しい事業計画をその地域の功績とし、土木業者を喜ばせるが、一般住民不在のままに計画は進められ、公表の段階ではその事業―道路開設は固定的なものとなり、道路が本当に必要か否かの問題に溯っての討議はなされない。したがって、環境影響評価もつくれる道路について行われるのみである。

日高山脈襟裳国定公園は民有地をほとんど含まない原始自然を最も多く残す、最大面積の国定公園として登場したものである。国及び道が公園計画を理想的に実現できる自然の聖地である。いま日本の他の美しかった公園が産業道路、観光道路、林道などによって傷つけられて行く現状で、まだ残っている貴重な自然を大切に、道路など計画せずに将来永く残る聖なる山を考えるべきではなかったらうか。昔は楽しい散歩道に恵まれた札幌も、いまは車の喧騒粉塵の中にのんびり歩ける場所は少ない。山地も車の侵入で自然環境は悪化し、元には戻らない。発想の転換では、道路中止はユートピア創造の行政となる。

静内、中札内両町の人達の古くから山の彼方の町に通じる道を憧れ求めていた執念、いま国や道の費用で与えられる道路を熱望する気持はよく分かる。ただ、すでに日勝道路、浦河―大樹線、襟裳海岸道路によって両町の交通は困っているわけではない。

道路開発の遅れを幸に日本一の自然王国の山麓基地とし、登山・山岳博物館、森林博物館、新趣向のホテル、山岳観賞のヘリコプター基地など独特な設備を持つ特徴ある発展計画も考えられ得るであらう。これは行止りの山麓の町として、横路知事の一村一品運動にも通じるであらう。

(北海道大学名誉教授・前会長)

北海道自然保護協会の

創立の頃

井 手 貴 夫

一九五九年即ち昭和三十四年六月頃だったか、館脇さんから突然北大の私の研究室に電話があって、今度北海道自然保護協会ができるから、私に評議員になって欲しい、ということであった。私はそれまで、この名物教授のお名前は知っていたが、お会いしたこともなかった。どうして私がそういうものになるのですか、と聞くと、あなたは山をよく歩かし、新聞にもものを書くから利用価値があるのだ、という答である。そういうことなら、自然は好きですから喜んでお役に立ちましょう、と承諾した。月に一回か、隔月に一回か召集がかかって植物園の事務室の二階に集まった。

会長は道庁の元勅任技師・林 常夫さんで、館脇さんが一切とりしきっておられた。当時のメンバーで私の記憶に残っている人はほかに犬飼哲夫、宮脇 恒(演習林長)、石川俊夫、小関隆祺、そのほかに今井道雄さんもおられたように思うがたしかでない。集会の内容はほとんど覚えていないが、いろいろの自然保護上の問題があって、それを館脇さんが主として説明しておられた。そういう

問題に対して、なんらか社会的な活動をして啓蒙するなり、阻止するなりできないのか、という私の質問に対して、館脇さんはそんなことをしたら大変なことになる、といって全く問題にされなかった。

ところで私は一九六〇年四月、コペンハーゲンの第二回国際ゲルマニスト連合の総会に出席することになったので、せっかく自然保護協会の評議員になったのだから、この機会にヨーロッパの自然保護や国立公園などを見て来たい、と館脇さんに相談したところ、それなら東京へ行って、田村 剛先生にお会いしてご相談するよ、といって名刺を書いて下さった。田村先生は先年亡くなったが、日本の国立公園の生みの親ともいうべき方で、晩年は海中公園の建設に情熱を燃やしておられた。館脇さんの名刺を持って中野のお宅に伺うと、ものの三、四分もたたないうちに、それはよい機会だ、ちよど六月下旬にポーランドのワルシャワで第三回国際自然保護連合の総会があるから、それに日本代表として出席するように、ということになった。このことに関しては省くことにしよう、面白い話があるが、それはここでは省くことにして、このポーランドの国際自然保護連合総会で私はじつに多くの自然保護の友人を得た。ドイツ自然公園協会長のアルフレート・テッパー、スイス自然保護協会事務局長の動物学者ディーター・ブルクハルト博士、残念ながらすでに故人になった造園学者のヴィルヘルム・ヒューポッター教授、インスブルックの元植物園長で蕨苔類の世界的権威であったヘルムート・ガムス教授など、みな私にはかけがえのない友人である。

それはとにかく、昭和三十六年の夏であったか、それ

までの北海道自然保護協会を解体して日本自然保護協会北海道支部として再出発することになった。林 常夫、館脇 操両氏は一応表から退いて、支部長に今井道雄氏、幹事に石川俊夫、小関隆祺、井手の三名がなった。あとで林氏と館脇氏との間の意志の疎通がうまく行かなかったからだ、と聞かされた。館脇さんはじつに純情な人であったが、また甚だ直情径行の人であって、とかく人と衝突することがあった。しかし館脇さんは「自分は犬飼さん共々若い頃から林さんには始終世話になっており、彼が自分のことを怒るはずはない」と後々までいっていた。おそらく、林さんに館脇さんのことを悪くいった人があったようにも思われる。

ところで新しく発足した日本自然保護協会北海道支部は小関さんからの時々のお知らせで、二カ月に一回くらい、農学部の小関さんの部屋に今井さん他幹部、それに演習林長の宮脇さんなどが集まって、その時々の方針などを話しあっていたが、多少本部から渡されてあった活動資金も幾度かの会合の通信案内などにほとんど消費してしまつて、その後は小関さんのポケット・マネーで運営されるような状態になった。これでは困るので、関連会社などの寄附をおごうということで宮脇さんと小関さんとで諸所に依頼したが、これは全く効果がなかった。

そのうちに大雪山のユコマンベツと黒岳とにロープウェイの計画の噂がひろがり始めた。たまたま日本山岳会員の伊藤秀五郎、金光正次、渡辺千尚、井手の四人が集まった席でこの話が出て、なんとか手を打たないと大雪山がむやみに観光開発される心配がある、それにはやはり自然保護協会をしっかりとらしたものにして、もっと活動できるようにしなくてはならない、という結論になつ

た。

そこでどうしたらよいか、ということではいろいろな意見の聞いたが、現実には資金も何もなく活動できないのだから、みんなが支援できるような形に協会支部を作り直すよりほかにない、という結論に達した。今井道雄さんともこの点で完全に意見が一致して、作り直すすると、日本自然保護協会の支部形式をやめて、独立した組織を作ろうということになった。しかし小関さんはこれにはどこまでも反対で、支部形式を残すことを主張したが、結局今井さんは支部長辞退書を日本自然保護協会に提出された。私は小関さんの反対を押し切って（事実そうするよりほかになかった）、昭和三十九年四月頃から動き始めて、多くの有力者に発起人になるよう勧説してまわった。ようやく九十人近い人の賛同を得て、さて会長にだれを推薦するかということになった。

当時、北海道銀行頭取であった島本 融氏を第一候補とすることに今井さんも賛成され、今井さんから交渉されたが、島本さんは固辞された。北海道相互銀行社長であった道家奇次さんは拓殖銀行頭取・東条猛猪氏を推され、今井さんも大賛成で、私がお願ひに上ったが、却々承諾されなかった。第一、自然保護ということはどういうことをするのですか、という質問に、当時の私なりに解答をしなければならなかったが、これにはポーランドの国際会議に出席した経験が大変役立った。しかしどうして

も承諾されないのを、今井さんと私とで再三お願いしてようやく承諾された。これは全く今井さんのお力で、そのかわり、今井さんが副会長として東条さんを援助するということで、ようやくまとまったのである。

こうして三十九年の七月初めにはすっかり準備がととのったが、協会の有力メンバーとなるべき林務部長の都合がつかない、ということ、結局発会式が開かれたのは、その年も押しつまった十二月一日であった。そしてこうして発会が引き延ばされている間に、黒岳とユコマンベツ（現在の旭岳温泉）のリフト建設が認可されたのである。

十二月一日の発会式は北大クラーク会館の特別食堂で開かれ、こちらで予定していた理事を決定。会長に東条猛猪氏、副会長に今井道雄、大飼哲夫の両氏。理事長は井手と決定。事務所は北大植物園に置いて、辻井氏が事務を取扱った。

会長就任後の東条氏は、理事会を東条氏の都合にあわせて開きはしたが、ほとんど毎回出席されて責任をよく果たされた。拓銀頭取としての東条さんの立場としては随分迷惑なこともあったと思うが、よく理事会の決定を尊重して対処された。一つには当時の北海道知事・町村金五氏が自然保護にじつに深い理解を持っておられたので、知事の財政相談役としての東条さんも、理事会の決定を尊重し易かったといえよう。

ただ大飼さんは非常に多忙な方で、理事会の日時を東条会長の都合だけで決めたので、出席しないことが多かった。議事の設定や運営はほとんど私がしたので、あとからたびたび大飼氏から注意を受けた。道や市の要職にあった大飼さんにとっては、道や市の方針とは無関係に協会独自の自然保護の方針を主張する私や理事会のやり方には甚だ迷惑したようである。「井手は独断専横でけしからん」と大飼氏は諸方で語っていたことを私はあとからいろいろな人から聞かされたことである。

当時は自然保護問題は厚生省の管轄で、当時の計画課長の大井道夫氏とは常に密接に連絡をとっていたので、道から自然保護上の問題について厚生省に照会しても、大井氏はまず北海道自然保護協会の井手と相談して欲しい、というような状態だったので、問題によっては道として非常に困るというようなこともあったろうと思う。協会設立後の運営や自然保護に関する提案その他の活動については、一応その後の会誌や会報に報告されているので、今日のところはこれでペンを置くこととする。

（北大名誉教授・初代理事長）